



回る

私はさっき、タクシーから観覧車に乗り換えた。こちらの方が、目的地に早く着きそうだったからだ。

私はさっき、タクシーの中で、何かを検索しようとしていた。そこまではよかった。しかし、何を検索しようとしたのかを忘れて、何を検索しようとしたのかを検索しようとしている自分に気づいたのだ。

私はスーツ姿のまま、慌てて観覧車に乗り換えた。

観覧車がガタンと音をたてて動き出した。思ったより揺れるみたいだ。

風の音は、上に行くにつれ、強くなった。

ごうーごうーと風が鳴り響く中、私は盛大にくしゃみをした。

いつもは恥ずかしいので、口を閉じ、押し殺すようにくしゃみをしていた。

けれどここは上空の密室だ。

上空の密室なんて、飛行機のトイレと、ここぐらいのものだ。

贅沢な時間だ。と私は思いながら外を見た。

もう景色はオレンジ色に染まっていた。

何を検索しようとしていたのか、私は思い出した。

回転木馬と観覧車、どちらの方が回転速度が速いのかだった。

「ありがとうございました～」と言いながら

係員の人が、さっさと私が乗っていた観覧車の中をほうきで掃いていた。

【2018-01-16】指さし小説 第22話

<http://p.booklog.jp/book/119705>

著者：かっこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/resipi77/profile>

今回のテーマは「回る」でした～

最初思い浮かんだのが、メリーゴーラウンドだったのですが、観覧車もそういえば回る！と思って書きました。観覧車なんてほとんど乗った記憶がないので、スキー場のゴンドラや、夜景を見に行った時のロープウェイを思い出して、書きましたので、本物の観覧車の感覚と違うかもしれません。

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/119705>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト